# 『耳嚢』に記録された民間療法

日本医史学雑誌第三十九巻第二号
平成五年六月二十日　発行
平成四年六月二十九日受付

浜田善利

## はじめに

『耳嚢』はまた『耳袋』とも書かれて、江戸時代に、旗本で、江戸の南町奉行を勤めた根岸鎮衛（やすもり）が著した随筆である。鎮衛（一七三七―一八一五）は天明年間から文化年間にかけての三〇余年間に本書を書き継いでいる。本書に収められた話は、奇談や雑話の類であって、いずれも飾らない文章で綴られ、著者の率直な人柄があらわれている。鎮衛自身の裁判の時の体験談や、奉行として市中の風説を探るものの言とするものが僅かにあるが、大部分は人から直接に聞いた話、誰かの話の又聞きの話といった形の、聞き書きとして記録されている。

『耳嚢』の記事の中には、医者の治療や民間療法に関係のある話も混入している。記録されている人名の中に、医師の与住玄卓、秋山玄瑞、木村元長、斎藤友益、城芸(宗)英、阿部春沢、西良忠、小川隆好、前田長庵、伊丹祐庵、栗山幸庵、その他に小児科医も鍼医も含まれているので、当時の医師の治療がうかがえる話もあり、鎮衛の耳に入った市井の民間療法の話もある。また健康にかかわりのある呪いの類もいろいろと書き残されている。そこで呪いの類も含めて、およそ医療、医薬に関係のある話を抽出し、その内容を、江戸時代の各種の民間療法の記録と比較しながら検討した。

検討するにあたっては、各種の療法を整理しなければならない。その基準には富士川遊の民間薬の分類[一]を採用した。その理由は、富士川の分類は、江戸時代の五〇数種の文献を集大成したもので、当時の疾病観を忠実に反映していると考えられるからである。

富士川の分類は次のようになっている。

一　消化器病、二　呼吸器病、三　泌尿生殖器病、四　神経系病、五　雑病、六　心臓病、七　皮膚病、八　中毒、九　外科的病、十　眼病、十一　耳病、十二　小児諸病、十三　婦人諸病

『耳嚢』に収められていて、民間療法に関係があると思われる話は、重複しているものがあるが、全部で約九九話あり、その中で医療と民間療法を合わせたものが六八話、呪いを用いるものが三一話あった。本研究では民間療法と呪いの方法を分けて整理した。各条の見いだしの上には、民間療法では◎印を、呪いの方法では☆印をつけて区別した。そしてそれぞれを、富士川の分類に従って配列した。なおこの分類の範囲に入らないものは、その後に付記した。

『耳嚢』の刊行本は、岩波文庫の旧版の二冊本（一九三九年初版）は六巻本であったが、現在の同文庫の『耳嚢』は上中下の三冊本[二]（一九九一年刊）で、これには新しく一〇巻本が収められている。また東洋文庫にも『耳袋』二冊本[三]（一九七二年初版）があり、これも一〇巻本であるが、この刊本はページ数の関係から、呪いや民間療法的な記事は削除されている。そこで本研究では岩波文庫の三冊本を用いることにした。この底本になったものは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の旧三井文庫本で、現在知られる諸本中唯一の一〇巻完備の本である。

# 第一章　民間療法

## 一、呼吸器病

### 《口内諸病》

◎歯の痛口中の崩れたる奇法

柘榴の皮を水につけてせんじ含、さてあま皮をとりて痛む所に入置けば、治する事たんてきにて即効の妙法の由。薬店へ取に遣はせば干たる柘榴あり。又下料なるものゝよし、横田泰翁物語也。（巻七）

◎口中妙薬の事

昆布を煎じて口中を洗ひ、西瓜の上の皮を黒焼にして附れば奇々妙々に治す。舌疽を愁ひし人に施せしに立所に治せしと、官医長島某密々に伝之。（巻八）

《歯齦諸病》

◎歯牙の奇薬の事

歯の動き亦は歯ぐきはれてなやむ時、南天を黒焼にして付れば快験を得るよし、人の語りし故、予が同寮の人其通なせしに、快く不動事神の如しと語りぬ。（巻五）

《歯牙諸病》

◎虫歯痛みを去る奇法の事

「韮の実を火に焚て、右煙りをもつて痛候所をくだ抔にて通し、いぶし候へば即効あり」と人の語りしに、亦或人の言へるは、「瓦を焼て半盃やうのものへ入、にらの実を置湯をかけ候へば、煙りたち候を、右煙りにて耳を蒸し候へば、耳より白きもの出候。右白きものは虫歯のむし也といへるが、まのあたり様し見し」と人の語りける。（巻二）

◎歯の妙薬の事

是も柳生氏語りけるは、同人の歯の至て悪しく、壮年の頃口医も、「四拾迄は此歯の無難ならざらん」事を示しけるが、或人の教にて、冬瓜を糠みそ漬にして干上げ、黒焼にして日々一度づゝ含みしが、五十に成て未歯の愁ひなし。併一両年又々震るぎ抔する事ありしに、亦人の教へけるは、「右冬瓜の黒やき、胡栗の渋皮共黒焼に成したるを合せ、又ちさの

棠にたちたる軸を黒焼になし、三味合せて用ゆれば奇妙」の由聞て、ちさの棠は時節後れて才覚無かりし故、冬瓜・くるみ両種を去年以来用ゆるに、聊か快き事おぼへしと語りぬ。（巻四）

◎歯の痛奇薬一法の事

生石膏四匁　天瓜粉二匁　竜脳五分

いづれも細末にして、其痛所に付るに奇妙のよし。咽喉に入て不苦よし、人の秘伝也。（巻八）

《咽喉及び食道異物》

◎小児餅を咽へ詰めし妙法の事

小児の餅を喰ひて咽へ詰りくるしむ時は、鶏のとさかの血を呑ませ候得ば、或ひは内へ治りまたは吐事妙也。衛斉同寮の彦坂某の子、まのあたり右の奇薬にて難義をばすくひしよし。（巻四）

《食道病》

◎痞（かく）いつ妙薬の事

阪野喜六郎祖母、かくいつの病ひを愁て、諸医手を尽しぬれど其験なし。或る人、「丸めろを絶へず用ゆれば、快」といふに任せ、なまはさら也、砂糖漬などになして朝夕用ひけるに、やがて快く成て八十余まで存命なせしと、喜六郎語りけるにぞ爰に記しぬ。（巻七）

《胃腸病》

◎しやくり奇薬の事

美濃の枝柿の蔕を水一杯にて煎じ用ゆれば、即時に止る事妙也。予が許へ来る牧野雲玄病家に、老人にて久々煩ひけるしやくり出、殊之外困りける故、加減の薬を用ひ一旦止りけれど、兎角時々其愁ひ有りしに、或日岩本家へ至り右の咄しをなしけるに、岩本の老人、「気逆には美濃柿の蔕を洗ひし水を用ひて度々奇功ある事」を咄し、到来献残の蔕を貯

置し由にて与へける故、早速煎じ用ひしに立所に止りぬと語りし故、予も右柿蔕貯の義申付ぬ。（巻六）

◎掛角一名訶黎勒之事

（前略）

かりろくは西土嶺南の産物にて、殊に食傷等に用薬なる故、常に坐上におくべきもの也。稜六筋有るをよしとす。八筋より十三筋、品々もあるを、榔精勒といふ。薬に用ひず。訶黎勒の功、食を下し、胸膈の結気を破る故、嶺南にては茶の如く煎じ、常に客にもてなすと言へり。天竺にても殊に用る薬成故、金光明経にも熱病を下す薬に用る事を載たり。（巻八）

◎溜飲并胸の焼るを止る妙法の事

赤螺を黒焼になせば鼠色也。右を粉になして、溜飲の強きには酒にて用ひ、胸の焼るには湯にて呑よし。栗山幸庵伝授之由、横田翁の語りける。予胸の焼る時施しける故、飲之に即効を得し故、其法を求めければ、赤にしの黒焼なると語りぬ。栗山幸庵、長府の医者の由なり。（巻十）

◎吐血を止る奇法の事

吐血止らざるに、童便を呑てよし。しかれ共宿に小児の無ければ、他より貰ふ時はさめてぬるく心持を損ざす。其時は其身の小便を呑てよし。右は予が親友山本某、文化六の年春、吐血して色々薬を施しけれど其験なし。或医師、右の法を伝へける故呑けるに、早速止りける由。其身の小便も、始めに通るはしほはゆさ強く、中半を呑ば少し呑よきよし。「朝など溜りたるは弥々呑にくき」と、山本語りし故、或る官医に其事語けるに、「随分医家に其法ある」よし語りぬ。「不浄を己が口に入る事、死せばとていかにせん」と難じしものあれど、「其天命を繋の一術なればまた何か苦しからん」と言ひし人あり。尤なる事にや。（巻十）

◎癪聚（しゃくじゅ）の事

近き頃の事とや。在辺に手習の師ありけるに、常に癪疾を愁ひけるが、死に至りて其子をよび隋身の弟子近隣の者へ頼みけるは、「我死せば火葬に致し何卒腹中の癪聚を打砕給るべし。輪廻深きやうなれど後来の癪を愁ふ人の介養手段にもならん」と、呉々も申置身まかりぬれば、遺言に任せ其死骸を焼けるに、骨中に一塊あり。「則癪塊也」とて、子弟其外共集りて鉄槌或ひは石を持て是を打に聊も不砕、千術百計なすといへ共聊も破れず。折節土老来りて其訳を尋、不思議におもひて手に持てる杖を持て突きければ、二つ三つに砕けれ。皆々不審に思ひ、割たるを取集め石・鉄槌にて打に、始の通敢てくだけず。杖をもてすれば微塵となる故、「右之杖は何の樹なり」と尋けるに、「いたどりを以作り候」由。いたどり（虎杖）は癪を治の妙薬ならんと言に書とめぬ。（巻一）

◎腹病の薬の事

腹を下し候薬を知行より来しもの進めける故、「如何成品也」と尋ねければ、「鰹をこくしやうにして給候へば立所に愈る」よし。田舎人の丈夫成るもの抔の事にや、いぶかしながら爰に記ぬ。（巻五）

◎痔の薬伝法せしものゝ事

酒井左衛門尉家来にて萱場町に住居せる前田長庵といへる医師、予が痔疾後腹合ひを愁ひける時薬を貰ひける時語けるは、痔疾の療治をなせる中橋の老婆あり。日々に門前に市をなし、近隣・遠所より日々に痔を愁る者来りしが、彼老婆煩ふ事ありて長庵が療治にて全快なしける故、長庵右老婆に向ひ、「御身子とても無く弟子も不見。痔の妙法は人を救ふの一法なれば我に伝授せん事は成まじきや」と切に乞ひしかば、彼老婆がいふ、「成程我等子共もなく誠に生涯の内のたづきのみにて、与風此薬法の四、五を習ひ覚へ聞及びて種々の痔疾を見ければ、外の薬は知ざれ共、数多く見候得ば自然と工風も付て、是は彼に用ひ彼には是を与へけるに、自然と利くと見へて繁昌せる也。長庵が其求の深切なるに任せ、是迄医師も追々うはのそらの求めあれどいなみたれ共、此度病気本腹の礼旁」とて伝授しけるが、内痔などを表へ引出し候は一草の葉を用ひ、外へ出候て直し候にも一草の葉を用ひ、付薬は練薬にて竜脳等を加へ香気至て強き薬にて、

其教へ主は委細の事も知らざれど、医家にて工夫すれば其道理至極面白き法のよし。同家中の男右伝法の訳を聞及び、多年痔疾を愁ひしとて頼けれど、本科の業ならねば他の邪摩と断けれど、切なく望みし故無拠右法を以薬を与へしに、立所に愈けると語りける故、爰に記し置ぬ。（巻五）

◎痔疾のたで薬妙法の事

石見川といへる草に、白芷を当分に煎じ用ゆれば奇妙のよし。吉原町の妓女など常に用るよし。吉原丁などの療治をせる眼科長兵衛物語也。（巻五）

## 二、呼吸器病

### 《衄　血》

◎鼻血を留る妙薬の事

青じといへる鳥の腹を割て、人参を一匁入て黒焼になし、鼻血出る時呑または付て妙なり。鼻血のしたりて下へ落しへ、右黒やきを振かけても速に止るとかや。誠に奇法といふべし。（巻五）

### 《喘　息》

◎ぜんそく灸にて愈し事

駒込辺にて一橋の御屋形を勤めし人、名は聞しが忘たり。背中五のゐに茶椀を伏せし程の焼尿（やけど）と見える灸の跡有りしを、予が知る人尋ければ、此跡を見る人はいづれも不審なせるが、十才頃よりぜんそくにて次第に募りて、十八、九の頃は年中快き日は算へる斗にて、寝臥も自由ならず甚くるしみけるを、彼元に仕へける奥州出生の若党、或日右主人にむかひ、「さてさて難儀の事見るにも忍びがたし。我等国元にて右ぜんそくを直す灸を人々に教へる医師ありしが、中々一通の者は其療治も難成」と語りけるを、主人聞て、「我壮年にて如斯なれば、生涯勤も成がたかるべし。依之詮なき事なれば死しても宜間、右療治を請度」といひしかば、「六ケ敷事にもなし、尤長き事にてもなし。只一時の事に

て、其者の手に艾を握りかため、いかにも堅くいたして五のゐへ灸すゆる事なり」と言ひし故、則右教の如くしてすへけるに、誠にあつさ絶がたく気絶せしを、また水などをそゝぎ或ひは為呑などして、とうとう火の消るまで居へしが、跡は腫上り膿崩れ、其みぎりは骨も見ゆる程なりしが、其後はぜんそく絶へて起らざりし由。七十才余にて寛政七年の頃身まかりしと、或日医師の語りしが、ぜんそくを愁ひたり共、かゝる灸を居へん人も多くはあるまじと一笑しぬ。（巻五）

◎ぜんそく奇薬の事

予が許へ来れる伊丹祐庵といへる医師は、壮年の時痰つよくぜんそくにて殊之外難儀せしよしを語りしに、六旬余の翁なるが今痰症共不見故尋ければ、不思義の奇薬にて今は誠に快全せし由語りし故、切に其奇薬を尋ねければ、右の快験につき可笑しき話有りとて、右薬剤を伝授旁物語りけるは、祐庵は信州の産にて、壮年に江戸表へ出、町宅をなして知音もなければ独身にて暮しけるが、彼ぜんそく起りて度々難儀せしに或人、「忍肉外三を練詰て用ゆれば妙々」の由語りし故、右四味を買調ひ、病のいとまに練つめて、伝授せる人の申せしは、「壷に入て三日程土中に埋置く事」のよし、「左なさん」とせしが、ぜんそく強く起りし時は梁へ縄を掛て体を結び臥り候程の事故、中ば壷へ入て残りを少々なめて味ひしに、其甘き事甚しければ、彼是して茶椀に一つ余もなめけるに、右薬に酔しや、心身蒙朧として前後も知らず其まゝ倒れ居たりしを、近所の者、大屋など立ち集りて、「本性を失ひし」とて、水を顔へかけ又は呼活などせし様子にて、漸心付見れば何か大勢集りて尋し故、しかじかの事と語りければ、「左には有まじ、気の違ひたるならん」と殊之外いぶかりしを漸申喩してければ、立集りし内に医師抔もありて、「埒もなき薬法を聞て危き事なるぞ」と笑ひて帰りけるが、右薬法の品々は委敷も語らざれば、左も有べし。祐庵が医案には、にんにく・玉子の類は脾胃をあたゝめ、一向よる所なき薬共思はれず。既に祐庵が右已来ぜんそくの愁ひを知らず。其後右薬を拵置て人にも与へけるに、度々巧験もいちじるく、労症に似たる痰病人をも快験せし事あると語りける故、其薬法を切に求めければ、

にんにく　砂糖　三年味噌　右三味弐百目づゝ
かしわ鳥の玉子弐十　味りん酒三升
右をねり詰め、壷に入て土中に埋る事三日にして貯ひおく事なりとかたりぬ。（巻五）

《咳　嗽》

◎咳の薬の事

多紀安長の家に、咳の妙薬とて人にも施せしが、或る人諸人の為なれば伝法を乞ひしに、「用あらばいつにても可被申越。法を伝へん事いなむにはあらねど、其法を聞ては信仰も薄き」と断りしを、切に乞ひ求めければ、無拠伝授せしが、黒砂糖に胡枡を配剤して与ふるよし。或人曰半げを少し加へて猶よろしき由。（巻七）

◎亦同法之事

水飴の中へ大根を薄く切りて一切入置、右大根の水不残飴へ吸候頃大根を取出し、右水飴を用るに咳を止る事奇妙之由、人の語りぬ。（巻七）

《労　咳》

◎鰹の烏帽子蛇の兜の事

鎌倉の海のかつほ、富士を拝むとて烏帽子を着ると、土俗の口の端に唱ふる事、予も右烏帽子をすへれば見し事有りき。是をとりて用ゆれば、癆症の病ひを直すと聞しが、「蛇の兜といふものを見し」と、営中にて某の語りしが、「其細工誠に甲に似て、錣并鍬形など現然と備はり、いかにして拵ける哉と思ふ斗り」のよし語りぬ。小鳥の巣を造り、蚕の繭を掛るに競ては、有まじき事にもあらず。是もまた造化の一奇事と、爰記しぬ。（巻十）

## 三、泌尿生殖器病

◎淋病妙薬の事

かる石を満願時抔の上酒にひたし、焼候て又ひたし、再篇致し候得ば粉に成くだけ候を、細末にして呑に甚奇妙なるよし。様したる人の物がたり也。（巻五）

## 四、神経系病

◎俄の乱心一薬即効之事

予が許へ来る木村元長が方へ数年出入する者、元長親の印牧玄順が隠宅へ見舞に、元長が方の僕と連立て行しが、夜に入帰りて我宿へ又来りけるが、眼血ばしり顔色殊之外赤く常ならざる事のみ言ひ罵りける故、元長全くの乱心とおもひける故、紫雪を弐、三匁呑して無理に為臥けるが、翌朝に至りて平日の如く成りしとかや。留守見廻に至りて酒をも呑けるが、渠は町家の手代をいたし重立取計ひし者なるが、主人の弟近頃来りて同居をなして殊之外不和なれば、兼て逆上の上に、酒を呑て一日誠心を失ひし故、逆上を押へるは黄金の気に石薬等を合せたる紫雪なれば、左もあるべき事也と爰しるしぬ。（巻四）

## 五、雑　病

《疝　気》

◎疝気胸を責る薬の事

予が許へ来る庄内領主の医師の語りけるは、同家中とやらん、疝積胸を責さし込て時々苦みけるが、或日強く起りて苦しみけるを、在所より来たる足軽是を見て、「我も疝気を愁ひけるに、奇妙の薬にて快よく、用ひ可給哉」と言ひし故、其薬法伝授を乞ひしが秘して不伝。翌日一薬を調合して煎じ候て与へける故、参り合せし医師是を味ひて、「随分気味面白」とて用ひけるに、即時に難儀をわすれ一夜用ひて翌日快験せし故、右医師念頃に尋ね問ひしに、ぶなといへる木の皮の由。然れ共本草にも不見、此ごろ阿蘭陀薬法の書を翻訳するもの有て其説を聞に、符を合するが如しとかや。此頃は彼医師、右の一薬に工夫の加減をなして度々功を得しとなり。（巻五）

◎疝痛を治する妙薬の事

またゝびの粉を酒また砂糖にて用ゆれば、其痛みをさる事妙之よし、営中にて我疝を愁ふるを聞て伝授なしけるが、予が許へ来る薬店を職として眼科をなしけるもの、疝気にて腰を痛め候事度々也しが、またゝびを壱匁、酒を茶椀に一盃用ひて即効得しが、素より酒量なき故、酒を茶椀に一盃呑事甚だ苦しき故、年も老ぬれば素湯又は砂糖湯にて用ひ見るに、酒にて用ゆるよりは、其効劣りぬと語りぬ。（巻七）

◎疝気妙薬の事

狩野友川咄しけるは、同人疝気にて兎角腹痛致し常に苦みけるが、或る人、「四国米を日々四、五粒づゝ用ふれば奇効ある」と語りしに、薬店にて求て不絶用ゆるに、右の疝気忘るゝ如く快とて、文化三年正月予が許へ来て画きける時咄しぬ。右四国米は黄ばくの実也といふ人あれどたしかならず。唐薬なり。（巻七）

《浮　腫》

◎浮腫奇薬の事　但右に付奇談

予夏に至り例年両足の臑に聊浮腫ありて、文化十酉年例よりは少しく腫れ多く、寿算七十七なれば、子孫「是を切に療養せん」といふ。然れども服薬の医いづれも、「愁とする程の事なし」といへ共、或人はなしけるは、「水気の薬にびんさゝらといふ草を用ゆれば妙ある」よし。「松平和泉守抔右薬を用ひて快験あるといふ事を聞及びし」と、与住玄卓語りけるゆへ、予が従者より彼家の知音まで尋ねければ、「右びんさゝら泉州の白金屋敷に多くありて、泉州など不断服用あり。尤右草を五歩程づゝに割り、水弐盃を一盃に煎じ詰て用ゆる」由。則取寄置し迚右草并先達て取置しとて実をも為持越されし。右実は菜種の大さ成もの也。用て聊験あれば、来春は右種を蒔ん事を家童に教諭なしぬ。右玄卓語りけるは、「右狐のびんさゝらといふもの、本草には不見。〇〇〇といふ書に、地〇〇といふもの右の草に当れり」と云々。近頃右びんさゝら、水病或ひは脚気によろしきと、専ら信用するもの多し。近き事のよし、上州とか、早州とか、相応

の百姓有りしが、段々身上衰へ、家族死果て只壱人にて、両足共腫候て農業もならず、誠に死を待斗なりしが、つらつら考て旦那寺へ至り、「斯々の事なれば何卒身上も寺へ可納間、死期まで養ひ給はるべし」と嘆きしかば、「旦縁の事安き事也」と、台所の片脇にあやしき部屋へ入れて養ひしに、一年ほどの内に腫もひき、足も丈夫に成りし故、和尚対談の上、元の家へ帰り住しに、又半年程の内に元の如く足はれければ、亦々旦那寺へ至りけるに無程快なりし故、其身も不思義におもひ、族も是を奇也とし、和尚へも尋問ひしに、「仏縁に寄て快といふは妄談なるべし。何ぞ快き訳もあらん」と、色々工夫なしけるが外心附なし。然るに「寺にて味噌を春候て樽へ詰候せつ、かびを生せざるため、山にある狐のびんさゝらをあみて底へ入、また蓋にもなしけるが、右故にや」と申ける故、「かゝる事も有けん」と、右びんさゝらをとりて、近村迄水気の者をたづね与へしに、何れも快由。是に依て、右辺は殊之外取用候よし。（巻九）

◎白胡瓜の事

白胡瓜、香の物に致し、或はもみ瓜にして喰すれば、水病に奇妙の由。然るに白胡瓜は余り作り候者無き故、甚求難し。予水病之時、漸々求めて用ひ候事有り。然るに或人の曰、「神奈川辺其外随分作り候者有由。一時もみ瓜・香の物にして和かにて、甘みも有るよし。神奈川辺にて専ら右を称し用候得共、江戸問屋へ出しては、青き瓜ほどには不望故、手前遣ひのみに拵候」よし、人の語りぬ。左も有べき事や。（巻九）

◎水病また妙法の事

ひゑをいりて粉にいたし、麦こがしの如く砂糖を調じ用るに、浮腫の症に宜敷よし。桑原某年々足腫れて難儀之処、知人の数に任かせ是を用ひしが、当年は甚少き由、桑原語りぬ。（巻九）

## 七、皮膚病

《あかぎれ》

◎人の血油薬となる事

ひゞ・胝の煩ひ其外切疵などに、穢太の元より出る油薬妙なるよし。右穢太膏薬は専ら人油を用るといふ物語の序、是も石黒語りけるが、同人一族の由、尾州にての事なりしか、至て強勇の兄弟あり。或夜盗賊大勢押入て家財を運ぶ様子を聞付て、兄弟枕にありし刀を引さげ立出けるに、盗賊共庭へ逃出しを追かけ、矢にはに両人切倒しけるが、弟成者袈裟に切倒したる胴の中へ、其兄足をふみ込しとや。跡にて兄語けるは、「右胴え踏込候節は、誠に熱湯へ足を入れし如く、扨さて人の血肉は熱するもの也」と語りしが、右兄従来垢ぎれにて難儀せしに、其年より右踏込し方の足は垢切たへて無かりしと也。（巻二）

《疣》

◎瘻（いぼ）を取奇法の事

「蛇のぬけ殻を糠袋様の物に包みこするに、いゆる事妙也」と人の語りしに、折節予が家内にていぼ多く面部に出来てこまりしが、人の教に任せ其通になせしに、愈ぬる事まのあたりに見し故、爰に記ぬ。（巻七）

◎瘻（いぼ）の妙薬の事

いぼを取るに色々呪ひまた薬あれど、蛇の抜殻をもつていぼの上をすり候へば、其直る事奇々妙々也。其外女の面などに、はたけ亦そばかすの類有りし時、右の蛇の抜殻にてこすれば直りて、面ての艶を生ずるよし、人の語りぬ。（巻十）

《その他》

◎チンカといふ病名の事

北海の人、最初に足へ赤く星の如くあざの如きもの出来て、漸々黒くなり、歯茎など黒く成て、凡百人に余り死せし由。其病ひ亜港（ヲロシヤ）の地などは多く、チンカといふよし。医宗金鑑外科部に、青眼牙疳とあるは右のチンカの事にて、右治療の法は右の金鑑にあり。「股の黒く成し所は針して血を取て吉し」とあるよし。与住医生来て物語也。（巻八）

## 八、中　毒

《菌　毒》

◎解毒の法承り置くべき事

予白山にありし頃同隣の人語りけるは、大前故孫兵衛屋敷の中間、或る日庭の内に出来し菌を調味して給べけるが、頻りに笑ひ出し、いかに叱り尋とも答へはなく唯笑ひ苦しみけるが、「全く狐狸のなす所」と、山伏など加持なしけれど其験なし。其頃御薬園肝煎いたしける小川隆好といへる医師是をみて、「食毒なるべし」とて尋ければ、傍輩なるもの、「今朝庭の内楓の根に出来たる茸を給べし」と由語る。「さればこそ、楓に出る茸は笑ひ茸とて毒気ありて笑ひ止まず。終には死せる事也」とて、両便不浄などいだせる所の最寄に土色黒くなりし所をとりて、湯にほだて為呑けるに、早速吐却して毒気を解しけるか快復せしと也。（巻二）

《筍　毒》

◎諸物制薬ある事

駿河其外にて竹細工をなすに、竹を甘草を以煮て遣ひぬれば、如何様の細密の細工を為すとも自在なるといへり。笋の毒に当りたる者に甘草を煎じ呑せしに、奇に其毒を解しぬと也。（巻七）

《解毒法》

◎解毒の薬の事

甘草と黒大豆を当分に煎じ用ゆれば、愈る事奇々妙々のよし、山本宗英、ものがたりなり。（巻八）

## 九、外科的病

《火　傷》

◎焼床奇法の事

鶏卵の油をつけて即効あり。右油の取やうは、玉子二つ程、玉子とじを拵へ候通、焼鍋の内へ入かきまはし、さて胡

麻の油を小さき茶椀に半分程さして、いり候へば少し色黒く成るを、小蓋のやう成ものして押ば油たるゝ也。右油をつけて治する事奇妙なり。右胡麻油をさすは、玉子の気を取る事故、玉子の油といふよし。山本宗英示談なり。（巻八）

《簽　刺》

◎尖抜奇薬の事

紀州家の健士或時魚肉を食し、与風咽吭へ其尖立百計すれど不抜。其儘に二、三日過しが、後は湯水・食事にも痛みありて甚難儀せしが、尾陽家之健士と出合ありて右難儀を物語りせしに、「某奇薬あり。用ひ給ふべし」と懐中の黒焼を与へける故、悦びて早速用ひしが、其翌日朝うがひ手水せしに、前夜迄に事かはりて聊其尖の憂をおぼえず。夫より食事の節其外にも一向憂なく、夜の中に抜け失せしと也。不思議の奇薬と紀州公へも申上、其薬施せし人に尋ね問ふに、「尾陽公の御法」のよし。依之御伝を御乞求め有しに、只一味のよし。依之予も其法を以、黒焼を申し付しなり。（巻六）

《打　撲》

◎打身・くじきの妙薬の事

桜の葉を摺りて焼酎にて煉り其痛む所へ塗、乾けばぬり又乾けば塗るに、忽快験をする事妙也。栗原翁知れるもの、荷をかつぎ薪の間へ倒れ、惣身を打候哉殊之外なやみけるに、田舎より来れる老人みて、「夫れは斯々なせば宜き」迚即座に其効を顕せしと語りぬ。桜の葉なき時は皮を粉にして用るよし。（巻七）

《切疵、出血》

◎金瘡・灼傷の即薬の事

途中或ひは差掛候て、血留其外薬をもたざりし時、大造の疵は知らず、聊の疵か亦焼どの愁ひには、青菜をすりて付るに即功ある事と、坂部能州かたりぬ。（巻四）

◎疵を直す奇油の事

木挽丁に西良忠といへる外科有り。彼者は予が許へも来りぬ。小児などのいさゝかの怪我はいふにも不及、瑾瘡類もまづ綿にひたせし油薬を附るに、其功いちじるし。其事を心易き者へ良忠語りけるは、「去る諸侯の奥へ療治にいでしに、早速全快の功有し後、病人全快を悦び、年久しく貯へ置く油薬あり、用にも立べくば用ひ見らるべしとて給りぬ。依之瑾瘡其外に試るに誠に即効の妙あれば、今に貯へて其功を得たり。良忠は老人なるが、伜が代迄は用ひ相成候べし。其後は此薬たへもせんか。法を知らざれば詮方なし」と語りぬ。良忠もいま存在なり。伜も年若なれば、永く療治をもなすべし。彼ものゝ家にかゝる薬有る事しらば益あるべき事と、爰記しぬ。（巻六）

◎銕物の疵妙薬の事

釘または針を踏たて怪我なしたる妙薬、まゝある事を、同寮にて咄合し。右の薬はかまきりを押潰しつくれば、残れる鉄気を吸出し奇妙に快よし。かまきりを干置貯へ、付てよし。なまなれば猶奇功有よし、或る人の語りぬ。（巻七）

◎血留妙薬の事

桐の若芽を黒焼にして付れば妙なるよし。右はある六部の僧、身内疵だらけなりしを、其同伴尋ければ、「今は仏道に入りて何か隠すべき。我等むかしは盗賊なりしが、其頃度々疵を請しに、右の桐の黒焼にて血を止めし」と語りし由。これを用るに妙也と、是も山本の語りし。（巻八）

《溺　死》

◎溺死の者を助る奇法之事

栗原翁の先人旅行之節、流川の河端に溺死の者有之由にて立騒ぐ故、其処へ至りて見ければ、大の男絶死の様子故、「不便の事」ととりどり囁きける処へ、所の老人来りて、其処の畑に有しねぎをとりてはなの中をつきて見けるが、「是は助るべし」と、何か黒焼を口へ突込しに、無程水を吐て息出し故助かりしと也。是を栗原子見て、老人を其泊りの旅宿へ招きて、右の薬法を乞しに、始はいなみけるが、流石下臈故金三両与へければ伝授なしけると也。「其薬を用る事、

葱にて鼻の穴をつき、其先に血つき候はゞ右薬を用ゆべし。若血出ざれば用ひて益なし」と彼老人の語りしと也。右薬を今の栗原貯へ居しに、門の前を大の男の水死して、口などあき絶命と見へしを、両三人にて荷ひ、母とみえし女跡より泣ながら来るを見て、立添ふ者に知る人ありける故声かけて尋れば、「水泳して溺死せる」よし故、早速呼入て右の法を以療治しけるに、葱の先に血つきける故彼薬を与へければ、息出しとて追々の知らせにて、翌日は厚く礼謝なして、一族来り謝しけると也。右法を切に乞ひ求めければ、左之通。別記あり。（巻七）

《毒　虫》

◎虫毒を去る妙法の事

都て何虫に不寄、さゝれし時、渋柿・ころ柿を摺附れば、痛み・かゆみを去る事奇妙也。さゝれたるのみにもあらず、御先手森山源五郎方の中間酒を好み、酔興にや蛇を喰けるに、惣身腫なやみけるに、或人ころ柿をすゝめ喰せければ、即座に快癒ありしとや。（巻十）

《蜂刺傷》

◎蜂にさゝれざる呪の事

蜂を捕らんと思はゞ、手に山椒の葉にても実にても能くぬりて、とらゆるにさす事叶はず。譬へさしても聊疵付いたむ事なし。是によりて蜂にさゝれ苦しむ時、山椒を塗りて付れば立所に痛を止る名法のよし、人のかたりぬ。（巻五）

《蝮蛇咬傷》

◎虫さし奇薬の事

或る海辺の在郷にて、親は漁得たる烏賊を料理、いかの墨手中に附居たりしが、其いとけなき子如何せしや、「まむしにさゝれし」とて泣わめく。かたへの人も立つどひしに、親成もの、「いづれをさゝれたるや」と尋、烏賊のすみ附し手にて其さゝれたるといふ処を撫などせしに、誠に忘るゝ如く痛去りて、程なく快成りし。其一郷は虫さしの分へはいか

の墨をぬるに快験を得る事、奇々妙々の由人の語りぬ。（巻七）

◎又（虫さし奇薬の事）

まむしは更也、都ての虫さしに、ころ柿を酢に付置て、さゝれし処へ附るに、是奇々妙々の由、人の語りぬ。（巻七）

《鼠咬傷》

◎鼠恩死の事　但鼠毒妙薬の事

西郷市左衛門といへる人の母義、鼠を飼ひて寵愛せしが、いかゞしけるや彼鼠、右母儀の指へ喰附しが、殊之外痛み腫ければ市左衛門立よりて、「憎き事哉、畜類なれば迚日頃の寵愛をも顧みず、かゝる愁をなせる事こそ不届なれ」とて、打擲なしければ逃去ぬ。其夜母儀の夢に彼鼠来りて、「右指へ白躑躅の花の干たるを附くれば、立所に鼠毒を去りて愈る」よしを述て、右白躑躅の花を枕元に置くと見て夢覚ぬ。驚き覚て枕元をみれば、有し鼠は死して白つゝじの花をくわへ居ける故、右花を指の痛に附しに、立所に腫も引て快成りしとなり。（巻五）

《犬咬傷》

◎病犬に喰はれし奇薬の事

金魚をすり潰し其所へぬれば直に快験なすよし。其証は金魚の落しを捨置に、犬・猫も一向不喰よし。是犬の嫌ひ候処、其愁ひを去る事知るべしと、人の語りぬ。（巻七）

《その他》

◎蛇穴の中へ入るを取出す良法の事

都て蛇の穴へ入らんとするは更也、男女の前後陰中へ時として入る事もあるよし。是を出さんと尾を取て跡へ引に、決て不出ものなり。医書にも、「胡椒の粉聊か蛇の残りし所へ附れば、出る事妙也」とありしが、夫よりも多葉粉のやにを附れば、端的に出るなりと、山崎生の物語りなり。（巻十）

## 十、眼　病

◎眼の妙法の事

柳生が許へ来れる八十の翁、眼鏡なくして今に物をみし故、其眼生を賞し尋しに、彼翁四拾の頃商家に寄宿してありし時、夜々廛の者集りて銭を繋ぐに、壱人の老人来りて、「我も手伝ん」とて、百文の銭をさしながら勘定するに、壮年の者同様なれば人々是を賞しけるに、外に薬迚用ひし事もなく、田舎の事なれば眼の為に医薬を加へし事なし。「或人の伝授にて、箒草をひたしもの又は切合にして不絶食せるよし教へし故、我も四十の頃より箒木草を日々一度宛用る」よし云ひしゆへ、柳生も切あへなどにして食するに、給悪き物にもなしと語ぬ。（巻四）

◎鱣魚は眼気の良薬たる事

宝暦の初、日本左衛門と云へる強盗ありて、其節の盗賊改徳山五兵衛方へ被召捕御仕置に成りしが、右吟味之節、同組与力何某、日本左衛門闇夜にも物をみる事顕然たるよしを聞て、吟味所の灯を消してくらくなし日本左衛門を引出し、右吟味所に掛有之手鎖・捕縄等の数を尋しに、聊無相違答へければ、右は昼見置候哉と疑ひある故、其辺に有之訴書を渡し可読よし好みければ、明りにて読程には無けれど無滞読ける故、「何ぞ薬等ありて眼精如斯や」と尋しに、「若年の頃人の教しは、うなぎを沢山に食すれば眼精格別」と語り、其食し様は、縦令ば朔日より八日迄日々うなぎを食し、夫よりは断物同様に一向に不食、最初先仏神成共祈誓して断物にして、さて七日程食するよし。尤鱣魚首の所は不給、首より五分程之間、胆のある所を捨、尾先は末之処迄給候由。うなぎの胆は眼の薬などゝいへど大き成空事にて、尾先は都て精身の集る処故、尾先は随分肉を不残食する由申けるを、彼与力も聞て、右に習ひてうなぎを不断食しけるが、眼気人よりは能かりしと、其子孫の語りし迚、谷何某かたりしを爰にしるしぬ。（巻七）

## 十一、耳　病

《耳へ虫入たるに》

◎耳へむしの入りし事

寛政七年卯六月下旬、池田筑州営中にて語りけるが、夜前甚難儀せし事有し由。其事をせちに尋ければ、灯のもとに頭を傾け居しに、耳の内へ余程の虫と覚へ飛入て、無体に穴中を掻わけ行と思ひしが、甚痛絶難く偏身汗に成りて苦みける故、親族・家童打寄て是を出さんとするに百計なし。兼て長屋へ来れる外科、耳の中へ虫の入りしを出せし事を近頃咄しけるに、彼の家士覚へて右の外料の元へ申遣しける故、五更の頃彼医師来て様子を見、紙よりの先へ何か膏薬を附て耳の内へ入、痛む所迄届きし後暫ありて引出せしに、膏薬解て右虫に附て出しを見れば、米つき虫と俗に呼べる虫也。彼医師の即効を賞し尋けるに、「別段の薬にもあらず、万能膏」の由。一度にて不出事もあれど、耳中の熱にて膏薬潤ひ、右虫を附て引出す」よし、「尤油薬をさし候へば虫を殺し候ゆへ、痛は去ると雖共取出すに難き」由、語りける也。（巻四）

《耳へ蜈蚣入たるに》

◎耳中へ蜈入りし奇法の事

右の席に柳生主膳正語りけるは、耳中へ百足の入りしは、中をも損ざしくるしきものゝ由、同人召仕のもの右の苦み有しに、或人の云ふ、「猫の小便をさせば右蜈を殺し即効を得る」の由、是を用ひしに早速快服せし由。猫の小便を取るには、猫をぬり物抔の上へ捕置、生姜をすりて猫の鼻の先へすりつければ極めて小便を通るよし。一事の奇法故、爰に記し置ぬ。（巻四）

## 十二、小児諸病

《疱瘡》

◎同（疱瘡病人）眼の閉付て明かざるを開く奇法の事

疱瘡の後かせなどに至りて、眼とぢてあかざる時は、あわびのしの頭の黒き所を水にひたし、外へ不障様まつ毛を眼

尻のかたへなづれば、ひらく事立所に妙也と、是又右医師の伝授也。（巻五）

◎疱瘡咽多く生ぜし時呪之事

疱瘡咽に多く生じぬれば、小児乳を呑、亦は食事等に難儀をなすを、宇津の谷の十団子に○○○を黒焼にして用ゆれば奇妙に通ずと、小田切語りけるなり。（巻十）

## 十三、婦人諸病

《血の道》

◎血の道秘法の事

麻苧を黒焼にして拾匁、産之節呑すれば血を治め血の道なき事、奇々妙々のよし、秘法とて伝へぬ。（巻十）

## 十四、付、薬物

◎奇薬ある事

予が許へ多年来る医師に与住玄卓といへる有りしが、或病家重病の愈しを悦び、家法の痢の薬を教へけるが、唐薬にも無之、和に多くある草一味也。「此頃一両輩の病人に与ふるに神の如し」と咄しぬ。薬名は医者故聞ん事もいかゞと其儘に過ぬ。（巻五）

◎黒焼屋の事

江戸表の繁花何にても用の足らざる事はなし。色々の商売もある中に、或人何か薬にする迚ひきの黒焼を求けるが、寒気の時節にて虫も皆蟄して求め兼しに、両国米沢丁松本横町にボウトロ丹といへる看板有之家に、何にても黒焼のなき事はなし。草木・鳥獣薬に成るべき品は形のまゝ黒焼にして商ふよし。人の為なれば爰に記す。（巻五）

◎吐薬奇法の事

医書にもあるや、薬店にも有之候越前真桑瓜の蔕を呑すれば、早速吐をなす事妙のよし。是又一時人を救ふの助けと、

聞しまゝ爰に記しぬ。（巻六）

◎猥に奇薬を用間敷事

肩のつよく張て難儀する時、白刀豆を粉にしてかたへ張る時は、立所に愈るといふ事有り。人の性にも可寄哉、川尻甚五郎、右薬を用ひて大いになやみしとなり。肩斗にも無之、面部・惣身迄腫てぶつぶつと出来ものなど出来、後は惣身の皮むけて甚だ難儀せしと語りぬ。猥りに奇薬と聞ても、用ゆるに用捨あるべきなり。（巻六）

◎蚊遣奇法之事

桧挽粉三升　樟脳壱匁　雄黄壱匁　薫緑壱匁

是は外挽粉を用るもあり、或は蓬を用

右合薬して袋に詰用るに、蚊を去る事妙也。（巻七）

## 第二章　呪いの方法

### 一、消化器病

《口内諸病》

☆口中痛呪の事

口中痛み候ば、何に不依漱候節右うがゐの水を左の手にうけ握りて、「肥後国三の君」と三度唱へ、又念仏にても題目にても三、五篇唱ふれば、即時に快験ありて、或る角力取の、町与力新五郎へ、歯の痛み苦しみし時、斯唱へぬれば忘るゝ如くなりしと、長僕共へ申けるよし故しるしぬ。（巻八）

《咽喉及び食道異物》

☆咽へ骨を立し時呪の事

小児など咽へ魚の骨を立て難儀の時、「鵜の鳥の羽がいの上に背置て骨かみながせ伊勢の神風」と、三辺唱へて撫れば抜る事奇々妙々のよし。或人語りけるなり。（巻四）

☆魚の尖立ざる呪の事

老人・小児魚肉を喰ふ時、右魚の尖不立には、左の真言を唱ふれば尖たつ事なしと。

とうきせうこん万物一体（巻七）

☆肴の尖不立呪文之事

或人語りけるは、魚骨に不限、尖の不立、又立てもぬける呪也とて、

トウキセウコン万物一体

かく唱ふれば奇験ありと、伝授なしけり。（巻八）

《吃　逆》

☆しやくり呪の事

しやくりを止るには、其人の口を明かせ、右口の内へ宗と云文字を三度書ば止る事妙なりと、人の語りし故こゝに認置ぬ。（巻四）

《痔　疾》

☆痔の神と人の信仰可笑事

今戸穢多町の後ろに、痔の神迚石碑を尊崇して香花など備へ、祈るに随ひて利益平愈を得て、今は聊の堂など建て参詣する者有り。予が許へ来る脇坂家の医師秋山玄瑞語りけるは、玄瑞壮年の頃療治せし霊岸島酒屋の手代にて、多年痔疾を愁ひて玄瑞も品々療治せしが、誠に難治の症にて常に右病ひを愁ひ苦しみて、「我死しなば世の中の痔疾の事は誓ひてすくふべし」と、我身の苦みにたへず常々申しけるが、死せし後秋山自雲居士といひし由。かゝる事もありぬと、玄

瑞語りしまゝを記し置きぬ。（巻四）

☆痔疾まじないの事

寛政八年予はじめて病疾の愁ひありて苦しみしに、勝屋何某申けるは、「小児の戯れながら、胡瓜を月の数求めて、裏白に書状を認め姓名。書判を記し、宛所は河童大明神といへる状を添へて川に流せば、果して快気を得る」と教へしが、「重き御役勤る身分、姓名を右戯れ同様の事に記し流さむは、不成呪事也」と笑ひしが、三橋何某も其席に有りて、「我も其事承りぬ。併大同小異にて、胡瓜ひとつへ右病疾全快の宿願を記し、河童大明神と宛所して是も姓名はしるす事也」といゝ、何れも大笑をなしぬ。（巻四）

## 二、呼吸器病

### 《衂　血》

☆鼻血をとむる妙法の事

鼻血出る人左より出れば己の左の睾丸を握り、右なれば右の睾丸を握り、両様なれば、両睾を握れば、感通して立所に止よし。呪ふ人女なれば乳を握りて呪に妙なるよし。（巻四）

### 《痰》

☆霜幸大明神の事

牛込冷水番所に、小川茂三郎とて弐、三百石取の人あり。玄関の脇に聊の祠有て、痰咳を愁ふる人是を祈れば功験甚いちじるく、快験の後小豆を一袋づゝ神納なす事也。其由来を知る人の語りけるは、宝暦の末に右小川氏の家来、夫婦者にて年古く勤けるが、名は山田幸左衛門といゝ、妻の名はお霜といひけるよし。常に夫婦共痰を愁ひ苦しみけるが、幸左衛門身まかりし時、「さるにても痰ほど苦しき病ひはなし。我死して後痰を愁ふる人我を念ぜば、誓つて平愈なさしめん」とて身まかりぬ。お霜も程なく同病にて相果しが、外に世話するものもなく素より子もなければ、主人より菩提

処へ送りて念頃に弔ひ遣しけるを、中山の貫主是を聞て、「斯迄に夫婦とも思ひ詰ぬればしるしも有なん」と言しが、成程其後は痰を愁ふるもの願立すれば印しあると人々言し故、幸左衛門の幸の字お霜の霜の字を合せ、霜幸大明神と祭り、今に小き祠あるに、近隣の者は不絶右の祈願するもの多しと也。（巻八）

## 三、泌尿生殖器病

《遺　尿》

☆寝小便呪法之事（附右に付笑談の事）

小児は更也、壮年に至りて、夜分此病ひあるもの世の中に少からず。或人の語りけるは、「男女に限らず新葬の仏を厚く信じ、朝夕怠らず日数を極め祈りぬれば、彼病ひを除く事奇々妙々」のよし語りぬ。埒なき事ながら、語りし人、「我もためしつる事あり」と申ぬれば、爰に書留ぬ。（附は省略）（巻八）

## 四、神経系病

《酔船、酔車》

☆船駕に酔はざる奇呪の事

附木を着坐の下に敷、又は懐中なせば、不酔事奇妙のよし。（巻九）

☆駕に酔ざる呪の事

駕気あるもの、男女に限らず、道中は勿論、遠方などへ行に甚だ困る事也。右の愁ひある人、駕に乗らんとする前広に、盃を男ならば左の袖へ入、胸の前を通し右の袖へ出し、さて駕に乗れば酔ふ事なし、女は右の袖へ入、左の袖へ出す事也。奇々妙々なる由、岡松某物語りなり。（巻十）

《驚　悸》

☆雷を嫌ふもの薬の事

予が一族の内に小普請組石河壱岐守支配ありしが、相支配に多門孫右衛門といへる人の家伝に、雷を嫌ふ者へ与へる薬有り。尤呪法同様の薬にて、雷のする時心穴へ当る事のよし。奇怪のやうなるが、畢竟其心を定静るの薬の由。嫌ひしものへ与ふるに験妙なりと人もいひけるよし。予が一族も彼薬貰ひしと語り、爰にしるしぬ。（巻四）

## 五、雑　病

### 《疝　気》

☆疝気まじないの事

京極備前殿、久世丹後守疝積を愁ふるを尋て、けやけき事にて被用も有之間敷事ながら、松平隠岐守在所詰之家来何某といへるもの奇妙の呪をなすよし、岩国紙壱枚へ十二銅を添遣せば、あの方にて呪ひ、右紙を差越、勿論白紙のよし。是を懐中なすに疝気の愁ひなしといへるまゝ、備後殿も六ケ敷事ならねば求め給ひしに、其後疝気を不覚よし被咄しと、丹州かたりけるゆへ、予も此病ひあれば切に尋しに、幸ひ寛政卯の夏江戸詰なせしと聞まゝ、名前并求め方を糺し呉候様丹州へ頼置きぬ。其後丹州も身まかり、其事を果さず。（巻四）

☆疝気を治する呪の事

或人のいへるは、疝気を憂ふるもの、灰をいかにも細かにして箱様の物の内に入置、尻をまくりて右灰の上へ胡坐すれば、睾丸の下りた所、右灰へ当りて跡二つ附也。右跡へ灸を三丁づゝすへれば疝気の根をたつと也。是をためしける人、奇々妙々也と語りぬ。（巻十）

## 七、皮　膚　病

### 《疣》

☆いぼを取候呪の事

雷の鳴る時、みご箒にていぼの上を二、三篇はき候得ば、奇妙にいぼとれ候よし。ためし見しに違はざるよし、人の

語りぬ。（巻六）

☆又

黒胡麻を、いぼの数ほど算へて、土中へ深く埋め置、右胡麻腐れ候得ば、いぼも失せ候なり。深く埋るは、芽を不出くさらする為なり。（巻六）

☆いぼの呪の事

いぼの呪ひ品々あるなれど、三日月へ豆腐壱丁を備へ念頃に祈る時は、其治る事妙也。右豆腐は川へ流し捨る事也。あやまつて其豆腐を喰ふものは、いぼ其喰ふ者へ生る事また奇妙のよし、人の語りぬ。（巻八）

《タムシ》

☆田むし呪の事

たむしといへる出来物に、鳴といふ字を三べん書て墨にてぬり、呪ふに立所に愈しとかや。鳴は田のむしを喰ふもの成故や。呪の類かゝる事多し。不思義也と一笑なしぬ。（巻八）

☆田むし呪の事

田むしを愁ふ者、唐墨を濃く摺て田虫の上を塗り、右の上へ紙にて押し候へば右墨紙へうつるを、右紙焼捨ぬれば、立所に田虫直るとや。（巻八）

## 九、外科的病

《火　傷》

☆焼床まじないの事

大沢に大蛇がやけておはします其水を付るといたまずうまずひりつかず

右の通唱へて水をかけ洗へば、極めて痛みを去ると、人の物語なり。（巻一）

《蜂刺傷》

☆蜂にさゝれたる呪の事

蜂の巣ある所に立寄れば虫毒を請る事あり。南無ミョウアカと云ふ真言を唱ふれば、蜂動く事能はず、蜂を施す事もならざるなり。蜂を手にして捕へても、右真言を唱ふれば聊害なし。予が許へ来る栗原翁、自信ためし見しと語りぬ。（巻七）

《犬咬傷》

☆病犬に喰はれし時呪の事

病犬に喰はれし時、なま豆を喰ふに、なまぐさき事更になし。右喰はれし所へ、たえず水をかくる事なり。なま大豆、なまぐさく覚ゆるを度として止る事、奇妙の由、人の語りぬ。（巻六）

## 十、眼　病

《ものもらい》

☆ものもらい呪の事

眼ぶちへ出来る腫物を俗に物もらひといふ。是を直すに、障子につばを以て指にて穴をあけ、右穴へ出来物ある方の目をおし付、庭の方を見出し、右目のとまる所へ三火づゝ灸をすへれば、其夜より快事奇妙のよし、原田翁の語り給ひし。（巻十）

## 十二、小児諸病

《疱　瘡》

☆疱瘡病人まどのおりざる呪の事

疱瘡の小児、数多く出来て俗にまどおりると唱へ眼あきがたき事あり。兼て数も多く、勧膿にも至らば眼明きがたか

らんと思はゞ、其家の主人払暁に自身と井の水を汲て、右病人の枕の上へ茶椀やうの物に入て釣置ば、始終まどの下りるといふ事なし。天一水を以火毒を鎮むるの利にもあるらん。瘡数の多きほど右器の水は格別に減り候事のよし。眼前見たりと、予が許へ来る医師の物語なり。（巻五）

☆疱瘡呪水の事

寛政八年の冬より九年の春へかけ疱瘡流行なして、予が許の小児にも疱瘡ありしが、兼て委任なし置ける小児科木村元長来て、「此頃去る方え至り其一家の小児不残疱瘡成りしがいづれも軽く、少々重きも足抔へ多く出来て面部等は甚だ少き故、斯揃て軽きもの珍らしきと云ひしに、外に子細もなけれど、神奈川宿の先に本目といへる所に、いも大明神といへるあり。彼池の水をとりて呑すれば疱瘡軽しと人の教に任せしゆへにやと語りしが、医の申べき事ならねど、害なき事故呪ひもなき事にもあるまじき間試み給へかし」と語りける故、召仕ふものに申付取に遣はせしが、右召仕ふ人帰り語りけるは、「誠に聊の祠にて、廻りに少しの溜り水といふべき池ありて、島少し有て柳一株の外は不残芋にて、右芋土の内より出て居、正月の事なるに未茎葉の有るもあり。別当共云ふべきは、右池の辺に庵室ありて禅僧壱人居たりしが、右社頭に縁記・起立もなし。疱瘡によきとて度々水を取に来るものは夥敷事の由。利益有や不知と禅気の答へのみ成りし。近隣の老婆の右召仕ふ者に語りけるは、右芋は彼老婆が若かりし時よりへりもせずふへもせざるよし。或人疱瘡に水よりは芋こそ可然と右芋を取りしに、彼小児甚なやみけると語りし由。江戸よりも水を取に来るもの数多なりと語ける」由。右召仕ふ者かたりけるとなり。（巻五）

## 十三、婦人諸病

### 《産　後》

☆産後髪の抜ざる呪の事

婦人の出産後、おびたゝしく髪の抜る者あり。産済て枕にかゝり候節、髪の内ひよめきといへる所へ生塩を聊か置時

は、毛不抜事妙のよし。また一法に、出産後いたゞきを毛ぶるひを以震ふ真似なせば、是また毛抜候事無之よし。（巻六）

### 十四、付、その他の効用

☆蜂の巣を取捨る呪の事

蜂の巣を取捨るに、箒を持て払ひなどすれば、飛散て害をなす事也。蜂の巣を取らんと思はゞ、右巣の下にある所の石にても瓦にても打返し候て、右を踏へ巣を取捨るに、いかやうの蜂にても害をなさずとの事也。同じ老人の語りけるは、蛇の石垣または穴へ入かゝりしを引出さんとするに、諸手を掛け力を入て引とも、たとひ蛇の胴中より切るゝ事はありとも、引出し難き事也。右を引出し候には、左りの手にて己が耳をとらへ、其間より右の手を出し、指にて蛇の尾先を捕へ引出すに、こだわる事なく出るもの也と語りぬ。其業ためせし事はなけれど、右老人まのあたり様めし見しと語りぬ。（巻八）

☆蚊の呪の事

五月節句に棗を焚候得ば、蚊不出事奇妙之由。或人是を伝授なして焚しに、軒端に群れても其家へ不入由。去年焚しが、今年は蚊甚だ少き事奇々妙々なりと、人の語りぬ。（巻九）

☆蟻をよける呪の事

蟻の多く出るとて人の咄しけるは、「砂糖壱斤半」と札に書て其所にはれば、蟻の出ざる事妙のよし。誠に可笑事にて、何故壱斤半と書くや不分事ながら、奇妙のよし、人の語りし。呪はわからざる事にも其妙ある事故、爰に記置ぬ。（巻十）

## 第三章　内容の検討

### 一、伝　聞

収録されている話は、著者が直接又は間接に聞いたものである。その聞いた相手は、さまざまであるが、医薬に関し

ては、医者の話として記録しているものがある。医者の話はその医者が実際に手掛けた医療から、医者自身が聞いた話まで含まれている。詳しい考証は抜きにして、話の中に名前が出てくる医者は、次のようである。

小川隆好（御薬園肝煎りいたしける医師、巻二）、木村元長（巻四。兼ねて委任なし置ける小児科、巻五）、秋山玄瑞（脇坂家の医師、巻四）、長兵衛（吉原丁などの療治をせる眼科、巻五）、与住玄卓（予が許へ多年来る医師、巻五。医生、巻八。巻九）、前田長庵（酒井左衛門尉家来にて萱場町に住居せる医師、巻五）、伊丹祐庵（予が許へ来れる医師、巻五）、西良忠（木挽丁の外科、巻六）、長島某（官医、巻八）、栗山幸庵（長府の医者、巻十）

医者でない知人からの伝聞も多く見られる。そのような話の中には、単に効くという事と、話した人が体験したことが含まれている。その中には、人名がはっきり出てくるものと、単に人が語ったとだけしか記していないものがある。また話を聞いて、その内容が著者が役に立つと判断して記録に残したものもある。

いずれにしても、著者が耳にした話を雑然と何でも記録に止めたというのが、聞き書きの特徴であり、同時にそれが本書の特徴となっている。従って、著者が生きた時代の世間で行われていた医療とそれに関係のある雑話が、一知識人の手によってまとめられたものとして、本書は興味深いものと思われる。

## 二、治療法

漢方の原典及び江戸時代の民間療法の諸書を参照すると、次のような類似性が見られる。

◎小児餅を咽へ詰めし妙法の事（巻四）

鶏のとさかの血を用いる例は、『経験千方』(四)の「もちだんごの類のんどへつかへたるに」の又方に見られる。

◎しゃくり奇薬の事（巻六）

柿の蔕を用いる例は、『経験千方』の「しゃくりやまざるに」の又方に見られる。

◎吐血を止る奇法の事（巻十）

童便を用いる例は、『経験千方』の「血を吐たるに」の又方に蓮の根しぼり汁とともに用いる療法がある。

◎淋病妙薬の事（巻五）

かる石を用いる例は、『和方一万方』[五]巻三十六、淋病部に、海ノカル石、川ノ浮石を用いる方法が記録されている。

◎俄の乱心一薬即効之事（巻四）

紫雪は、『用薬須知後編』[六]巻三に紫雪法があって、次のように説明されている。

升麻六銭黄金十両寒水石石膏各四両八銭犀角羚羊角各一両玄参一両六銭沈香南木香丁香各半両甘草八銭右水五升煮黄金至三升去金入諸薬再煎ジテ一升ニ至リ濾滓ヲ去リ朴硝三両二銭ヲ入レ微火ニテ煎シ柳木ノ箆子ニテ撹シ手ヲ止メスニ凝レトスルヲ候テ磁器ヘ冷シテ凝シ雪トナス　達按スルニ金一両ハ拾銭ナリ十両ハ百銭也

◎浮腫奇薬の事（巻九）

狐のびんささらを用いる例は、『経験千方』の「小便通ぜざるに」の又方に見られる。

◎解毒の法承り置くべき事（巻二）

楓の木に出た茸が有毒であることは、『金櫃要略』[七]の果実菜穀禁忌併治第二十五、食楓柱菌而笑不止治之以前方にあり、この方の内容は、食諸菌中毒悶乱欲死之方にある。

◎解毒の薬の事（巻八）

解毒に甘草と黒大豆を用いるのは、『金櫃要略』の果実菜穀禁忌併治第二十五の中に見られる。

◎打身・くじきの妙法の事（巻七）

桜の皮を用いる方法は、『経験千方』の「うちみの手当」の又方に見られる。

◎虫さし奇薬の事（巻七）

まむしに嚙まれたとき、いかの墨をつける例は、『和方一万方』巻十六、諸虫咬部「蛇ノサシタルニ用ル方」イカノ黒

ミを用いる事が記録されている。

◎又（虫さし奇薬の事）（巻七）

まむしに嚙まれたとき、ころ柿を酢につけて使う例は、『和方一万方』巻十六、諸虫咬部「マムシノ咬タルニ用ル方」に、串柿酢ニテトキ付ヘシとある。

◎眼の妙法の事（巻四）

箒草を用いる例は、『経験千方』の「雀目の手当」の又方に、はゝき木のみを用いる記録がある。

◎吐薬奇法の事（巻六）

医書にもあるやと記されているが、真桑瓜の蔕を吐剤とするのは、『傷寒論』[八]の瓜蔕散、及び、『金櫃要略』の一物瓜蔕湯の話である。

## 三、薬　物

取り上げられた薬物には、単味で用いる民間薬としての用法が多いが、中には、二―数種類を一定の割合で処方する例もある。これらは著者が接触した医師が伝えたもの、あるいはその又聞きなどであろう。

単味の薬物では、江戸時代に普通に登場する種類の他に、特に興味深いと思われるものが含まれている。その中で幾つかの例を次にあげる。

外国伝来の薬物としての訶黎勒の効用（巻八）。

痔疾のたで薬の石見川（巻五）は、タデ科の一年草、イシミカワであろうが、これを痔の薬とする例は、『民間薬』には見当たらない。

鰹の烏帽子、蛇の兜（巻十）は、薬としてよりも、博物学的な興味が感じられる。

疝気妙薬の四国米（巻七）は、『手板発蒙』[九]にあって、黄柏の実のことである。

水気の薬の狐のびんささら（巻九）は、マメ科の一年草、カワラケツメイである。(一〇)

## 四、薬物の起源

薬物の起源の説明として、次のような話が記録されている。

◎癪聚の事（巻一）

癪聚にイタドリ（タデ科の多年草）が効くのではないかという話。

◎諸物制薬ある事（巻七）

笋の中毒に甘草を煎じて飲む話。

◎鼠恩死の事、但鼠毒妙薬の事（巻五）

鼠の咬傷に白つつじの花が効く話。

◎病犬に喰はれし奇薬の事（巻七）

金魚を外用する話。

## 五、呪いについて

呪いについては、著者自身が「呪はわからざる事にも其妙ある事故、爰に記置ぬ」とあるように、理屈では理解できないものである。それでも、そのような呪いにも頼らざるを得なかった時代の記録として、意義があると考えられる。

呪いで病を治す方法は、次のように大別することができる。

①呪文による方法

②特定の場所の水や薬物などの物を介する方法

③社などに祈願する方法

ただしここでは、それぞれの内容の可否の検討は省略した。

## 六、その他

『耳嚢』には、以上に取り上げた諸話以外に、医療に何らかの関係がありそうな記録がある。また一部で同じ内容が重複して記録されたものがある。それらは項目のみを列挙しておく。

巻一

◎大木口哲・大阪屋平六・五十嵐・狐膏薬江戸塵最初の事

☆京都風の神送りの事

◎実母散起立の事

◎奇病并鍼術の事

巻二

◎外科不具を治せし事

巻三

◎鬼神を信じ薬剤を捨る迷ひの事

◎楓の茸喰ふべからざる事（巻二に既出）

巻四

☆疱瘡神狆に恐れし事

☆奇病の事

☆怪病の事

巻五

◎水戸の医師異人に逢ふ事

◎地蔵の利益の事
◎狐痛所を外科に頼み其恩を謝せし事
◎道三神脈の事
☆疱瘡神といふ偽談の事
巻六
◎十千散起立の事
◎奇薬を伝授せし人の事
◎幻僧奇薬ををしふる事
巻七
◎市陰の外科の事
◎疱瘡の重体を不思議に救ふ事
◎人の歯にて被喰し毒深き事
巻八
◎淋石の事
☆油むし呪の事
巻九
◎気の毒なる奇病の事
◎建部家の家来腮外れし療治の事
巻十

## 文献及び註

本報は、第九三回日本医史学会（一九九二年六月、東京）にて発表を予定していたものである。

（一）富士川英郎編『富士川遊著作集5、民間薬』三―三三九頁、思文閣出版、京都、一九八一。
（二）根岸鎮衛著、長谷川強校注『耳嚢』（全三冊、岩波文庫）岩波書店、東京、一九九一。
（三）根岸鎮衛、鈴木棠三編注『耳袋』（全二冊、東洋文庫）平凡社、東京、一九七二。
（四）熊谷嘉行編『経験千方』金剛出版、東京、一九七三。
（五）大塚敬節、矢数道明編『村井琴山、和方一万方一、二』近世漢方医学書集成三三、三四、名著出版、東京、一九八一。
（六）松岡玄達原著、難波恒雄編集『用薬須知』漢方文献研究会、茨木市、一九七二。
（七）漢・張機著『金櫃要略方論』人民衛生出版社、北京、一九八二。
（八）漢・張機著『注解傷寒論』人民衛生出版社、北京、一九八二。
（九）大坂屋四郎兵衛原著、難波恒雄編集『増補手板発蒙』大阪漢方医学研究所、箕面市、一九八〇。
（一〇）日本大辞典刊行会『日本国語大辞典五』小学館、東京、一九八三。

なお『経験千方』の一三七頁には「きつねのふんさくら」と誤読してあるが、「きつねのびんささら」が正しい。

（熊本工業大学）

# Medical Treatment and Folk Medicine Recorded in "Mimibukuro"

by Toshiyuki HAMADA

"Mimibukuro" is a book written by Moriyasu Negishi in the Edo-period. M. Negishi (1737-1815) was a magistrate in the city of Edo. He was very much intersted in listening to and recording many kinds of the stories, which were told by various kinds of people, such as public officers, samurais, merchants, doctors, etc.

Among the stories of this book, there are found some stories concerning folk medicine, medicinal substances and charms. In this report, I studied such kinds of the stories.

As the results of my studies, I have shown that some medicinal stories originated in the old Chinese medical books. Other stories were supposed to have been popular among the people of Edo.